



AVメーカーの Sなお姉さんたち

童貞誘惑パラダイス

早瀬真人

挿絵／英田舞

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

目次

第一章	美少女従姉妹の足コキ廻り	4
第二章	美人女子校生の精液搾り	47
第三章	幼馴染みのローションプレイ	100
第四章	グラマラスお姉さんのパイズリ指導	136
第五章	お姉さんたちのダブル口唇奉仕	192
第六章	お姉さんたちの童貞廻り〜淫虐の宴	231

登場人物

Characters

金子 亜衣

(かねこ あい)

圭佑の従姉妹でAVメーカー「V&Cカンパニー」広報担当兼アシスタントディレクター。折に触れて圭佑をいじめるSなお姉さん。

尾田 夏希

(おだ なつき)

「V&Cカンパニー」の女社長。豊満な肉体を誇るクールビューティー。

遠藤 理名

(えんどう りな)

「V&Cカンパニー」事務員。一見真面目、清楚なお嬢様風で口調もおっとりしている。

飯田 真里子

(いいた まりこ)

「V&Cカンパニー」メイク、衣装担当社員。女優業もこなす才媛。

沢村 圭佑

(さわむら けいすけ)

就活中の童貞少年。お姉さんタイプが大好きなM気質で、亜衣に誘われ「V&Cカンパニー」に短期バイトとして入社。

いまだ視線の定まらない圭佑だったが、亜衣がまたもや桶に手を伸ばすと、期待感に胸を打ち震えさせた。

（最後まで確かめてないって、今度はいったい何をやるんだろう？ これ以上の気持ちいいことなんてあるんだろうか？）

ローションの仕上がり具合は、亜衣のレクチャーどおりに作り、固くも緩くもない。初めての体験とはいえ、違和感をまったく感じさせないという点では、何も問題はないと思われた。

手のひらに掬ったローションが、ペニスへと落とされていく。それだけでは足りないのか、亜衣は両手で大量の透明液を再び掬い取り、怒張の上へと滴らせた。

太股の上には亜衣が腰掛けていたため、両足はびったりと閉じている。股間の三角地帯にはローションの池ができ、肉筒だけが顔を出しているという状態だった。

「ふふ。おチンチン、ひくひくしてる」

たつぷりとローション液を含ませた亜衣の手のひらが、静脈の浮き出た肉胴をしつかりと握りこむ。根元から亀頭にかけてしごきあげた瞬間、圭佑はあまりの快感から上半身をバウンドさせた。

「気持ちいい？」

「あ、あああああああ！　すごい！　すごく気持ちいいよおおお！」

これまでの亜衣の手コキや足コキは、唾液という潤滑油を使用してきたが、受ける感触はまったく違う。

ローションのなめらかさと、肉胴の表面を手のひらが滑る感覚は絶妙なタッチで、これ以上ないというほどの峻烈な快楽を生じさせていた。

もちろん肉筒を包みこむローション液の圧倒的な量が、さらなる刺激を与えるのである。

亜衣は右指で上下動しながら、股間の溜まりローションを左指にまとわせ、陰囊を撫であげていく。

「ああ！」

悦楽の微電流が背筋を走り抜け、圭佑は思わず両足の爪先を湾曲させた。

「圭佑のタマタマ、びくびくしてる。なんかおいなりさんみたいになってるよ」

肉幹を嬲りあげる指は、もどかしいほどのスローリーな動きだったが、激しい摩擦と同等の快楽を与えてくる。

（こ、こんなにゆつくりしごいでいるのに、なんで!?)

指と肉茎の隙間から白濁化したローションがグチュ〜ンと溢れ出し、ニチャニチャ

と響き渡る淫音が、さらに圭佑の性感度数を上昇させた。

「あ……あ。亜衣お姉ちゃん」

子犬のように鼻を鳴らし、つい懇願の甘い視線を送ってしまふ。亜衣はそんな反応など最初からお見通しなのか、口元に満足そうな笑みを湛えながら言い放った。

「イキたいの？」

「う、うん」

「そう。どうやらローションの具合は、ちょうどいいみたいね。じゃイカせてあげるか」

激しい手コキを想像した圭佑だったが、予想に反し、亜衣は突然怒張から両手を離れた。

（えっ？）

氣勢を削がれた圭佑の失意をよそに、亜衣の細い右腕がすつと横に伸びていく。そこにはローションを入れていた段ボール箱が置いてあり、亜衣はその中から小さな箱を手に取った。

圭佑の訝しげな眼差しが白い箱に注がれる。蓋を開け、中からピンク色の奇妙な物体が取り出されると、圭佑は思わず眉間をしかめた。

それは長さ五センチほどの筒状の形をしており、弾力性のあるところを見ると、どうやらゴムか何かでできているようだ。生まれて初めて目にする代物だったが、圭佑はハッと思いついた。

「ひよつとして、それってオナホール？」

「そう。シリコンでできてる、大人のおもちや。撮影でも使うことあるから、ちゃんと覚えておきなさいよ」

大人のおもちやといえば、女性に快楽を与えるバイブレーターとピンクローターの知識しかなかった圭佑には、どうにもピンとこない。

(こんなもの、本当に気持ちいいんだろうか?)

怪訝な表情を崩さなかった圭佑だったが、新鮮な試みに、なぜか期待感が込みあげてしまう。

亜衣はにこやかな笑みを浮かべると、オナホールを勃起へと近づけた。

穴の入り口がペニスを通り、肉筒にぴったりとした密着感を与える。痛みはまったくくない。それよりもシリコンの感触は想像していたよりしつとりとしていて、肉茎に何とも心地いい感覚を与えていた。

「ふふ、気持ちいい？ 筒の中はうねっていて、イボイボもついているのよ。おチンチ

ンに吸いついてくるようでしょ？」

亜衣はまたもや大量のローションを真上から滴り落とすと、ゆったりとした抽送を繰り返した。

「あつ！ ああああああ!!」

それは衝撃的ともいえる瞬間だった。

指とはひと味違う感触が、肉胴の表面を絶妙なタッチで往復していく。

オナホルルの内側がいったいどんな仕組みになっているのか、確認のしようがなかったが、それは固くもなく緩くもなく、心地いい刺激をまんべんなく与えていった。

「気持ちいいの？」

「ああ、すごい！ 亜衣お姉ちゃん、すごいよ!!」

「ふふ。もっと気持ちよくしてあげる」

徐々に速くなるオナホルルの上下動が苛烈さを極めていく。

(シリコンがびったり貼りついて、おチンチンを絞ってあげる！ まさかオナホルルがこんなに気持ちいいなんて!!)

やがてローションが淫猥な音を響かせ、それが圭佑の射精願望を頂点へと導いていった。



「あああああああ！ ひっ……くっ！　そ、そんなに動かしたら!!」

「何!?　イツちゃうの!?　いいわよ！　イキたいならイツちゃいなさいよ!!　ほら！　ほら!!」

亜衣はサディスティックな本性を剥き出しにし、言葉責めとともにパンパンに張り詰めた勃起を縦横無尽に嬲り倒していく。

根元を支点にして、ペニスが前後左右にぶれるほどの凄まじさだ。

ローション液が飛び散り、ニチュグチュと淫らな水音がシャワー室の壁に反響する。勢子に追いつめられた鹿のように、逼迫した感覚が脳全体を埋め尽くしていく。

圭佑は眉間に皺を寄せながら、膨張した自身の逸物を瞬きもせずに見つめた。

「あ……あ……あ」

亀頭が膨れあがり、尿道口がひくひくとおちよぼ口を開きはじめる。全身が硬直し、こめかみに青筋が浮き上がると、ついに滾る欲望は射精の瞬間を迎えた。

「い……イクっ……イクっ」

「たくさん出しな!」

亜衣が両手でオナホールを掴み、さらなるピストンを見せつけると、圭佑はカッと大きく目を見開いた。

「イクっ！ イクうううううううううう！！」

鈴口から、乳白色の塊が弾丸のように噴き出す。それは天高く跳ね上がり、放物線を描きながら圭佑の首筋へと落下した。

「キャハハ。出た出た！ すっごい量！」

もちろん亜衣の手の動きが止まることはなく、オナホールが上下動するたびに、ポンプに吸い上げられたように、立て続けに何度も淫欲のエネルギーが宙に翻る。

「昨日あんなに出したのに、ホントに絶倫なんだね」

呆れ声の亜衣の言葉を遠くで聞きながら、圭佑は床から浮かせていた頭をがっくりと落とした。

頭の中が霞がかり、思考がままならない。目一杯の射精の満足感に浸りながら、圭佑は恍惚の表情を浮かべていた。

真理子のフェラチオも最高だったが、オナホールも決して悪くない。いや、これは癖になりそうな不思議な魅力を持ち合わせている。

亜衣はオナホールを外すと、ペニスに指をそつと絡めた。

昨夜に続く大量射精のせいか、怒張はやや萎靡を見せはじめている。圭佑がようやく薄目を開けると、驚いたことに、亜衣は腰に跨がろうとしている最中だった。

「昨日のあなたの陵辱行為を盾に取って、ヌルヌルになった亀頭を、私の顔にたっぷりと擦りつけるのね？ そして勃起したおチンチンを、無理やり私の口の中に押しこむんだわ！」

（社長がまた壊れた！）

どうやら夏希のM気質に、またもやスイッチが入ってしまったようだ。

真理子はまだ身体を痙攣させながら嬌声をあげ続けていたが、今の圭佑はそれどころではなかった。

ブリーフごとズボンを引き下ろされ、弾け出た怒張がペチンと下腹を叩く。その直後、真理子の絶頂の悲鳴が室内に響き渡った。

「あつ！ いやっ！ いく！ またいくうううううう!!」

上半身をブリッジ状に反らし、ガクガクと太股をわななかせ。その反動で、ローターが腔内から飛び出し、朱唇の割れ目から大量の愛液が溢れ出した。

「脱ぐのよ」

夏希に促されるまま、あつという間にTシャツが脱がされ、ズボンと下着が下ろされる。

「しゃ、社長。レズシーンの意見を聞きたいんじゃない……」

「おだまりなさい！ 昨日の今日でまた迫ってくるなんて、まるで飢えた獣と同じだわ！」

（迫ってるのは、社長のほうじゃないですかあ）

パンツを奪い取る夏希の目は、昨日と同様、もう完全に据わっている。

「ああ。いやらしい。いやらしい匂いが漂ってくるわ！」

夏希はそう言いながら跪くと、膨れあがったペニスを両手で鷲掴み、自らの顔に擦りつけた。

「あ……うっ」

柔らかい唇の感触に青筋が脈打ち、先端から先走りの汁が染み出してくる。

「こうやって……こうやって私の顔を穢すのね？」

（穢してるのは社長自身ですう！）

夏希は根元を掴み、肉胴をぶるんぶるんと上下に動かしながら、頬や口元に自らペニスピンタを張らせた。

その光景、そして陶醉した夏希の表情だけでも異様な昂奮を与えたが、肉筒の上下動が絶妙な刺激となつて、心地いい快楽を覚えてしまう。

「あん。皮が伸びちゃつて。ちゃんと剥いておかないと」

包皮を剥き下ろされると、尿道が引き絞られ、大量のカウパーが溢れ出す。夏希は恍惚とした顔つきをしながら、さらに唇に擦りつけていった。

「今日はテーブルの上に座って、私に口での奉仕をさせるつもりだったんでしょ？
そしてまた、たつぷりとザーメンを放出するんだわ！」

「え？」

圭佑はチラリと長テーブルに視線を送った。

二度目のエクスタシーに達した真理子は、再び気を失っているのか、陶然とした表情を浮かべたままピクリとも動かない。

圭佑自身も二人のレズシーンをさんざん見せつけられ、自らの手で真理子に潮を吹かせただけに、性衝動は頂点へと達していた。

一刻も早く射精したいという本能には敵わない。

圭佑は言われたとおり、仰向け状態の真理子のとなりに腰掛けた。夏希が目を爛々と輝かせながら、屹立にしゃぶりついてくる。

「あああああ！」

圭佑は、ビクンと上半身を反らせた。

敏感になった亀頭が舌のざらつきに刺激され、脳天から突き抜けるような快楽を与

えてくる。

「私の頭を押さえつけて、無理やりイラマチオをさせるのね」

(要するに、僕にしろってことでしょ!!)

唾液を唇からプチュと滴らせながら、夏希が哀願混じりの視線で見上げてくると、圭佑は両手で頭をそっと抱えこんだ。

その瞬間、さほどの力を加えていないにもかかわらず、夏希の顔がグツと沈みこんでくる。肉筒をズズツと吸引し、あつという間に喉深くまで呑みこんだのだから堪らない。

(あ、当たってる！ 喉の奥におチンチンの先が当たってる!!)

その感触に驚愕しながらも、夏希はさらに陰囊を片手で引つ張りながら喉を締めつけた。やはり苦しいのか、両目を固く閉じ、眉間にくつきりとした縦皺を何本も寄せている。

「ん！ んむうううううう」

夏希は自発的に、自分自身をマゾ地獄に陥れているようだ。これが一番快楽を覚える趣向なのだろう。

夏希が目尻に涙を溜めながらゆつくりと顔を上げると、唾液に塗れた肉胴は蛍光灯

の光を反射し、てらてらと濡れ輝いていた。

「う……ふううん」

鼻から甘い吐息をつきながら、ゆつたりとしたディープスロートが何度も繰り返される。

この程度の律動なら、射精までまだ保ちこたえられると考えた圭佑だったが、その後、想定外の出来事が起こった。

横に寝ていたはずの真理子が、床にすつと降り立ったのだ。その姿を視界の隅に捉えた圭佑はハツとし、慌てて真理子を仰いだ。

「圭佑君。よくもやったわね」

両拳を腰に当てがい、アヒル口を尖らせながら、真理子が仁王立ちをしている。

「あ……あ。あの……」

「許さないから。覚悟しなさい」

頭上から響き渡る声に何事かと、夏希は口から赤く膨れたペニスを抜き取った。

「しゃ、社長。なんとか言ってくださいよお」

「ほんとにひどい子だわ。今も私に、無理やりイラマチオさせてるんだもの」

「そ……そんなあ」

夏希の瞳はとろんとしている。どうやら、まだ現実の世界に戻っていないようだ。真理子は段ボールの箱からリモコン付きのゴム製の輪っかを取り出し、冷ややかな笑みを浮かべながら言い放った。

「社長のせいじゃないわ。私が止めてって言ったときに、圭佑君、止めてくれなかったでしょ？」

「あっ！」

つい好奇心に衝き動かされてしまったこともあるが、あのときの真理子の否定の言葉は、もっとしてほしいという意味だと受け取っていたのだ。

やはり童貞故の経験不足か、圭佑は一転して泣きそうな顔を見せた。

「ちゃんと、お返しはさせてもらいますからね」

真理子にはにんまり笑うと、大股で近づき、ゴム製の輪っかをペニスの根元にはめ込んだ。輪っかの端からはコードが伸びており、その先には見慣れたリモコンが付いている。

（ああ。このグズって、こうやって使うのか!?)

圭佑がハッとした瞬間、真理子の手の中で、カチッとスイッチの入る音が聞こえてきた。

「あつ……くつううううう！」

電流を流したかのような微振動が根元に走り、ペニスが左右に細かく震える。初めて体感する感覚に、圭佑は口元を引き攣らせた。

（な、何、この動き!? 人間の手じゃ絶対無理だよお!）

圭佑が呻き声をあげると、真理子がすぐさま足元に跪いてくる。夏希は微振動を続けるペニスを、うつとりした表情で眺めていた。

「いやらしいわ。この状態のまま、たつぷりと白いミルクを飛ばしちゃうのね」

「社長、しつかりしてください。これからの時間は、圭佑君のお仕置きタイムに変更しますから。いいですね?」

そう言いながら、真理子はさも楽しそうに圭佑を見上げる。

「私がいいって言うまで、射精しちゃだめよ」

真理子は最後に念を押すと、怒張をガポッと呑みこんだ。

「ああああああ!」

根元にはバイブの振動、亀頭から肉胴の中途まで柔らかい唇が何度も往復を繰り返す。そのダブル攻撃の凄まじさに、圭佑は咆哮した。

「真理子さん! 私にもおしやぶりさせて!」

ビンビンに反り返った極太が口から抜き取られると、夏希が横から舌を絡めてくる。メトロノームの振り子のように、ペニスが左右に傾くたびに、真理子と夏希は交互に濃厚なフェラチオを展開させていった。

（ああ、社長と真理子さんが代わりばんこに!? エッチすぎるよお!）

V&Cカンパニーで働きはじめてから、数々の淫蕩な行為を受けてきたが、それは日増しに過激さを増していくように思える。

圭佑は早くも脳漿を沸騰させ、腰をくねらせながら盛んに裏返った声を放った。

「あああああああ! ああああああ! だめ! だめえええ!」

「私もさつきそう言ったでしょ? こんなんで射精したら、もっとひどいお仕置きするから」

どちらかと言えば、温厚な性格の印象が強い真理子だけに、彼女の言葉責めが新鮮なギャップを生み、射精願望にさらなる拍車をかける。

圭佑は苦悶の表情を浮かべつつ、もはやその喘ぎは慟哭と化していた。

「あつ、くつ……ひいひい!」

ヴボツヴボツと淫らな吸茎音を高らかに響かせながら、夏希と真理子のダブルフェラがラストスパートをかけていく。唾液でコーティングされた飴色の肉根は、あまり

の膨張率のためか、まるで鬱血したような赤黒さを見せるほどだった。

「あ……あ、も、もうイキそう」

「ダメ。まだ許してないわよ」

甘美な陶酔のうねりが脊髄を走り抜ける。ゴールの見えない焦燥感が極上の快楽となつて身を焦がしていく。

真理子は夏希の怒濤のフェラからペニスを無理やり引き抜くと、渾身の力を込めた右手で肉胴を激しくしごき立てた。

「あ、そ、そんなことしたら……」

真理子は圭佑の顔をキッと見つめている。すがるような視線を送っても、彼女の口から許しの言葉が出ることはない。それが深奥部に快感の塊を蓄積させ、活火山のごとく、大爆発を誘発させていった。

一触即発の瞬間を間近に控え、切ない痺れが忍耐という結界を崩落させる。

「あ……イクっ……イクっ」

圭佑が両目をカッと見開き、自ら括約筋を緩めたその刹那、突然会議室の扉が開け放たれた。

「圭佑君、どうしたの？ 社長いなかったの……きゃあああああ！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!